

生涯音楽学習における音楽的意味と学びの編み直し

三重大学教育学部准教授 川村有美

はじめに

生涯音楽学習は、「すべての人々が生涯にわたって、そしてあらゆる次元で行う、自由な音楽活動（音楽の享受・表現・創造）そのものを意味する概念」¹である。生涯音楽学習は、乳幼児期から老年期に至る個人的な発達過程における“垂直”的次元と、学校教育だけに限らず社会教育や家庭教育までを含む教育機会の“水平”的次元との統合を意味している。

本誌では、生涯音楽学習の実際について、研究・実践の両側面の現状及びそこに見られる課題を取り上げてきた。そしてこの課題に対して、「音楽文化の振興のための学習環境の整備等に関する法律」が制定された後、生涯音楽学習のシーンがさらに深化・発展しており、これから先、さらに豊かなシーンを彩っていく只中にあることも明らかにしてきた。

本稿では、多様な生涯音楽学習のフィールドについて触れた上で、音楽の学びの場で生成される音楽的意味や、音楽の学びを成り立たせるために必要な視点を考察する。このことが、“生涯音楽学習における心と音楽がどのような関係にあるのか”を問う一助になればと思う。

多様な生涯音楽学習のフィールド

本誌では、特集記事として、生涯音楽学習のフィールドの実際を取り上げた。第36号（2005年）では、主に生涯学習センター、公民館、文化センター等の官を主体としているものと、カルチャーセンター、音楽教室といった民を主体としてもものに大別されている現状と成果について述べられている。そしてその7年後の第63号（2012年）では、特集「生涯音楽学習の実際 最新情報」が組まれている。ここでは歌川が「生涯学習・社会教育実践をめぐるには、教育・文化行政とも教育・文化産業とも異なるアクターに対する社会的期待が高まり、同時に、議論も蓄積されてきた。特に阪神淡路大震災後に着目を浴びたボランティア、1998年に法的根拠を得たNPO、少子化や国立大学の独立行政法人化等の影響から、運営方針に転換を迫られ始めた大学は、生涯音楽学習を支える新たなアクターとして、今後もその動向が着目される」²と記している。1990年代以降に本格化した生涯音楽学習が、質と量の両側面から裾野を拡げ、多様化する現状を伝えているのである。

多様な生涯音楽学習のフィールドでの活動内容は個別的で多岐にわたっており、一括りで語れるものではない。しかし、その多様性は認めつつそこには通じるものもある。それは、それぞれの持ち場にお

いて、その場に参加する者一人ひとりが音楽を軸とした学びを生み出して、それを編み直している点である。

「物語」としての音楽の学び

筆者は、成人音楽学習を中心としつつ、関係論に立脚した学びが生み出す生涯音楽学習の重要性を述べ、その一つの道筋として「物語 (narrative)」の視角から音楽の学びをとらえることを提案した³。「物語」とは、「エピソード、行為および行為の説明を組織化する手段」⁴であり、人が、自己や物事を認識する時の枠組みになるものである。「物語」は自然に生まれるものではなく、他者や事物との相互関係のもとに、社会的・文脈的に生じるものである。

例えば、私たちは日常生活で様々な経験をする。他者との語り・自己との語りの中では、それらの多くの経験の中から何かを選択し、またある経験を切り捨てながら、「前向きな自分」「人生が思うようにいかない自分」など、「物語」を構成して自らを認識している。同じような経験をしていても、そこから織り上げられる「物語」は異なったものとなる。

このように、個人の経験を枠づける意味のまとまりとして「物語」をとらえるならば、学びも一つの「物語」として位置づけられることになる。音楽の学びもまた、その場にいる一人ひとり（個々の学習者や指導者）が相互主体的に関わり合い、その相互性から紡ぎ出される意味の生成をめぐって「物語」が編み直されていく営みなのである。この営みは、音楽を学ぶことによって自己や他者、学ぶ対象との関係をより豊かに更新し続けていくあり方を示しているとも言える。

生涯音楽学習でこうした音楽の学びのあり方を求めた時、どのような風景が見えてくるだろうか。

そこに描き出されるのは、指導者が専門的な技術や知識を一方的に伝達する風景でもなければ、学習者のニーズ至上主義に基づき何かを消費するだけの風景でもない。一人ひとりの学習者や指導者、そして音楽という対象との関わり合いの間に生まれる意味をめぐって学びが編み直され続ける、そうした生成の風景が見えてくるだろう。

3つの音楽的意味をめぐって

上に述べたように、生成の風景として見える音楽の学びでは、関係の中で生まれる意味をめぐって学びが編み直され続ける。ここで言う「意味」とは、いったい何を指すのだろうか。

手元の辞書で「意味」を調べてみると、「記号・表現によって表される内容またはメッセージ」「物事が他との連関において持つ価値や重要さ」(『広辞苑』)と説明されている。また星野は、イアン・クロス (Cross, I.) に依拠しながら、音楽的意味が「音楽の美的な意味」、「音楽の個人的な意味」、「音楽の社会的な意味」の3つに分類されると言う⁵。

「音楽の美的な意味」は、音楽構造そのものに「美」があることを前提とし、そこには揺るぎない信頼がある。一方、「音楽の個人的な意味」と「音楽の社会的な意味」は、個人の置かれている文脈に大きく

支配されている。

同じ楽曲でも、誰もが同じように聴くとは限らない。私たちはこのことを経験的に理解している。例えば、ある人が「いいな、美しいな」と聴いた楽曲に対して、別の人も同様の感情を抱くとは限らない。人によって、音楽からのイメージが異なって聴こえるのである。つまり人々は、同一楽曲に異なる意味を見いだしているのである。「音楽の個人的な意味」とは、このように生じるものである。そして「音楽の個人的な意味」が日常的に生じるのは、「音楽アイデンティティ」⁶が存在するからである。「音楽アイデンティティ」は、個人の音楽経験、記憶や回想が関わり合い結びつくことによって確立する。

さらに、「音楽の社会的意味」は、個人が所属する文化や集団によって生成するものである。「音楽の社会的意味」は、音楽の意味が社会的・文化的な背景と切り離すことができず、そこでの音楽“活動”の意味と相補的な関係にあることを前提にしている。なおこのことに関わって、社会的な集団において役立つ音楽“機能”としての意味についても触れておきたい。仲間と同じ音楽作品やジャンルのものを聴く・演奏することは、そのグループのアイデンティティの創出や維持に結びつくのである⁷。

以上のように、音楽の意味は3つに分類される。「音楽の美的意味」は、個人の文脈から独立しており自律的である。一方、「音楽の個人的な意味」と「音楽の社会的な意味」は個人の文脈の中で生まれる。これら3つの音楽の意味は、それぞれに独立しながらも、お互いに補い合い、関連しあっている。先に『広辞苑』から引用したように、音楽の意味もまた「他との連関において持つ価値」なのである。

音楽的意味と学びの編み直し

生涯音楽学習における音楽的意味は、一人ひとりが織りなす「音楽の個人的な意味」が交わることで生まれる。また、各々の「音楽的アイデンティティ」が多層にある生涯音楽学習では、その集団における「音楽の社会的意味」が生み出されることを求めたい。

以前に拙稿で、成人音楽学習において学びを成立させるために得ておくべき三つの視点を示し、具体的な事例を紹介した⁸。これらの視点は、生涯音楽学習に考察の範囲を広げても重要であると思われる。以下に改めて記したい。

第一の視点は、音楽の学びを「物語」としてとらえることである。学習者がこれまでどのような「物語」を生きてきて、今、どのような「物語」を生きているのか、そしてこれからどのような「物語」を生きようとしているのかということに、まずは指導者が自覚的にならなければならない。

第二の視点は、「物語」を中心に展開していく指導を行うことである。「物語」は語り・聴くという相互行為によって生じる。だからこそ、語り・聴くといった相互行為を中心とした指導が重要となる。なぜ、この曲を弾きたいのか — 語り・聴くという相互行為のなかで、はじめて学習者と指導者共通の「物語」が紡がれていく。そして、表現への思い、つまりき、どのように音楽を表現したいのか — 等々、語る言葉を介して問題や課題が自覚的に構成されていく。その結果として、演奏技術が高まり、同時にそのことによって音楽をめぐる「物語」が新たに編まれていくのである。

第三の視点は、対話的空間を創り出すことである。本稿ではとりわけ、この対話的空間の創出が重要となることを述べたい。

筆者は、指導者としてあるピアノサークル⁹にかかわっていた。このピアノサークルの場は、まさに対話的空間として機能していた。通常のピアノ学習では、基本的に指導者と学習者との一対一の指導が

行われる。しかし、このピアノサークルはそうではない学習形態をとっていた。ある学習者のレッスンが行われている時、他の学習者は、少し離れた場所で輪になってその演奏を聴いている。また、ずっとじっくり聴くだけでなく、そこでは、音楽をめぐる自由な語り合っただけなのである。この場は、仲間の演奏を聴き、それについて語り、またそれにとどまらずピアノに対する思いや表現へのつまづきなど、ピアノをめぐるさまざまな語り生成される対話的空間であった。

この対話的空間は、音楽の学びの成果を発表するだけの空間ではない。学習者一人ひとりが各々の学びの成果を聴いてもらい、他の学習者がそれを聴き・語るという相互行為を通して、それぞれが自己の学びの足元を見つめ直し、これからの課題をも同時に発見していく、いわば音楽の学びとそのプロセスを分かち合う空間である。同時に、一人ひとりの「物語」を聴き、そして語るなかで、そこに居合わせる学習者全体の「物語」が生成され続けていく対話的空間なのである。

こうした対話的空間が、今後ますます重要となると思われる。なぜなら、こうした空間において「音楽の社会的意味」が生まれるからである。繰り返しになるが、音楽的意味は、社会的・文化的な背景と切り離すことができず、そこでの音楽“活動”の意味と相補的な関係にある。加えて、仲間と同じ音楽作品やジャンルのものを聴く・演奏することが、そのグループのアイデンティティの創出や維持に結びつくという音楽“機能”としての意味にもここで留意しておきたい。上に記したピアノサークルの対話的空間では、仲間と同じ作品を演奏し、聴き合うといった活動があった。そうした音楽“活動”を通じて、音楽“機能”としての意味が充実し、「音楽の社会的な意味」が発生していたのである。さらに、仲間の演奏を聴きながら語り合うという対話を通じて、一人ひとりの「音楽の個人的な意味」が、ピアノサークルという集団の「音楽の社会的な意味」へと拓かれていく。個々の「物語」を紡いで学習者全体の「物語」を作り出すプロセスは、同時に、「音楽の個人的な意味」を「音楽の社会的な意味」に拓いていくプロセスでもある。

これまでに、音楽の「個人化」¹⁰に対する警鐘が鳴らされてきた。この警鐘を重んじる時、なおさら「音楽の社会的な意味」を生み出す対話的空間の必要性が実感できるだろう。音楽の「個人化」が浸透した今、どこでも・誰でも個人で音楽に接することができる。そうした効率的・合理的な音楽環境にあるなかだからこそ、非効率的・非合理的ともいえる対話的空間において共同で聴く・語ることがもたらす音楽の学びの意義を主張したい。「音楽の社会的意味」の生成は、「音楽の個人的意味」をより深めることにもつながる。また逆に、深化していく「音楽の個人的意味」が集団における「音楽の社会的意味」を豊かにもするだろう。

本号の特集は「心と音楽」である。生涯音楽学習において、一人ひとりの「心」のうちにある「物語」をそこに集う者すべてにとっての「物語」にしていくためには、対話が必要である。このような対話を通じて「物語」を共有することは、「音楽」が持つ意味を「個人的意味」から「社会的意味」に拓くことにも結びつく。また逆に、すべての者にとっての「物語」が一人ひとりの「物語」を、あるいは「音楽の社会的意味」が「音楽の個人的意味」を充実させることもあるだろう。個の「物語」と全体の「物語」の往還。「個人的意味」と「社会的意味」の往還。他者や対象との関係におけるこうした意味を巡る学び

の編み直しが、生涯音楽学習において充実することを願いたい。

おわりに

本誌第 50 号（2008 年）において第一弾「心と音楽」の特集を組んだ。それから 12 年を経た今回は同テーマの第二弾となる。第一弾では、人間の心と音楽の深い関係について、音楽療法を中心に取り上げた。それに対して本号では、音楽のもつ美的な意味を認めつつも、生涯音楽学習の様々なシーンで、人と人とが介するという社会的・文化的な文脈の重要性に軸足を置いて考察した。「この音楽を聴けば、心が元気になる」という発想だけでは立ち行かない。本稿でも述べたように、音楽作品それ自体に意味が内在しているだけではない。目に見えない・測ることに馴染まない心に対して音楽の処方箋的な提示には限界がある。そのことにまずは自覚的になることが、生涯音楽学習の多様なシーンを彩り、心と音楽の関係を豊かにする契機となるのではないだろうか。

注・引用文献

- 1 丸林実千代『生涯音楽学習入門』音楽之友社、1999 年、p.20.
- 2 歌川光一「生涯音楽学習の新たなアクター～本誌の動向と共に～」『音楽文化の創造』第 63 号（財団法人音楽文化創造）、2012 年、p.7.
- 3 川村有美「関係論的な学びとしての成人音楽学習」『音楽文化の創造』第 36 号（財団法人音楽文化創造）、2005 年、pp.62～65.
- 4 T・R・サービン、長田久雄訳「心理学の根元的メタファーとしての語り」『現代のエスプリ メタファーの心理』No.28 至文堂、1991 年、p.175.
- 5 星野悦子「音楽的意味とその伝達 - 音楽心理学の見地から - 」『音楽文化の創造』第 74 号（財団法人音楽文化創造）、2015 年、pp.22～25.
- 6 MacDonald,R.A., Hargreaves,D.J., & Miell,D. (Eds.) (2002).Musical Identity. Oxford University Press (岡本美代子・東村知子訳『音楽アイデンティティ』北大路書房、2011 年)に詳しい。
- 7 星野（前掲論文）、p.23 .
- 8 拙稿（前掲論文）
- 9 このピアノサークルは、大学の公開講座「はじめてのピアノ」に参加した受講者の有志が公開講座終了後、立ち上げたものであり、筆者は指導者として携わった。詳しくは、磯田三津子・川村有美「公民館における生涯音楽学習」『音楽文化の創造』第 36 号（財団法人音楽文化創造）、2005 年、pp.26～29 . を参照されたい。
- 10 竹内貞一「音楽療法における記憶の役割～音楽回想法について～」『音楽文化の創造』第 60 号（財団法人音楽文化創造）、2011 年、pp.19～22 . に詳しい。